

音楽的思考の論拠とする「教科等横断的な視点」の 「発問」の導入効果

— 中学校歌唱共通教材《花》の実践より —

尾崎 祐司*・小助川 謙二**

(平成31年2月4日受付；平成31年4月9日受理)

要 旨

本稿は、音楽科において「教科等横断的な視点」に立った「発問」の導入効果を明らかにするための研究である。筆者らは、新中学校学習指導要領で謳われている「資質・能力」を音楽科の授業で育成するには、五感を介した出来事の性質を問う「発問」をすべきである、という仮説を生成した。そして、中学校第3学年を対象に歌唱共通教材《花》(滝廉太郎作曲・武島羽衣作詞)の実践研究を行った。授業では「教科等横断的な視点」として、「花」が日本人にもたらす意味についての「発問」を行った。その議論を論拠に具体的にどう歌うべきか音楽的に思考する活動を行った。

授業の結果、生徒はワークシートに「花が散る瞬間の切なさなどを思い浮かべながら歌うことを心掛けた」といった「音楽を形づくっている要素」の他に歌うための論拠を記載するなど「発問」の導入効果に有意な結果が得られた。

KEY WORDS

教科等横断的な視点 音楽的思考 発問 三つの柱 実感を伴った

1 問題の所在

2017年3月告示の中学校学習指導要領(以下、新学習指導要領)では、改訂の基本方針に「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進」を取り上げ、「特に学習の基盤となる資質・能力(言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む。以下同じ。)、問題発見・解決能力等)や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実することや、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。」¹⁾と提示している。これは2016(平成28)年12月21日の中央教育審議会答申を踏まえ、「変化の激しい社会の中で、主体的に学んで必要な情報を判断し、よりよい人生や社会の在り方を考え、多様な人々と協働しながら問題を発見し解決していくために必要な力を、生徒一人一人に育てていくためには、あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力や、教科等の学習を通じて身に付けた力を統合的に活用して現代的な諸課題に対応していくための資質・能力を、教育課程全体を見渡していくことが重要」²⁾、と各教科独自の学びの概念で完結しない授業を求めていると言えよう。そして、新学習指導要領ではこの「資質・能力」を養うために「三つの柱」、すなわち①「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)」、②「知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性等)」に整理している。そのため、総則において「生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実施に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、(中略)教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことに努める」³⁾ことが示された。

本研究における問題の所在は、この「教科等横断的な視点」を授業に具現化する際の観点にある。この点について、先の中央教育審議会答申は「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善の方策の一つとして「これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科等横断的な視点に立った学習が重要であり、各教科等における学習の充実はもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める必要がある。」⁴⁾とその必要性を指摘している。

音楽科の学習においてこれらの具現化を果たすには、特に思考力・判断力・表現力等を養う学習過程⁵⁾を展開する際、当然ながら音楽的思考につながる指導方略⁶⁾を立てる必要がある。「音楽的思考」とは兼平(2017)によれば「音を媒体とした問題解決過程を強調した、音楽科に特有の思考を言い表した用語である。具体的には、音や音楽につい

*芸術・体育教育学系 **上越教育大学(修士課程)・上越市立潮陵中学校

て知覚・感受したことを基盤として自分の表現したいイメージに合うように根拠をもって音や言葉等を選択したり、組み合わせたりして演奏表現や作品をつくる際の連続のプロセスで働く思考を指す。」⁷⁾と定義している。しかし、「教科等横断的な視点」を取り入れるためには、教材曲そのものの「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受」⁸⁾するための議論の論拠が必要になるのではないであろうか。つまり、生徒自身が自らの音楽表現についての思考活動が起きうよう、拠りどころとする教材曲について何らかの問いを提示する必要があるのではないかと筆者らは考えた。例えば、《夏の思い出》(江間章子作詞・中田義直作曲)の歌詞は、江間章子が戦争末期の空襲に日々脅える中、偶然庭先で見かけた水芭蕉から「きれい」と強く感じた印象がNHKから委託された「夢と希望」のモチーフとなっている⁹⁾。しかし、歌の歌詞には「夢と希望」を想起させる語彙は直接書かれていない。そのため、実際の指導場面では、「水芭蕉の花が咲いている」の「強弱をどのように付けたらよいか」といった発問をした場合、音楽の性質に関する話題とその拠りどころとなる発問が無ければ、回答の論拠は楽譜に記載されている強弱記号 (*mp, pp, dim.*) の順守にすぎないのではないかと、という疑問を抱く。すなわち、筆者らの仮説は、『水芭蕉の花が咲いている』をどう歌うか」といったオープンエンドな発問ではなく、「江間章子の戦争での恐怖体験を基に考えると、彼女は『水芭蕉の花が咲いている』様子を見てどういった感情を抱いたのか」という当事者の立場で五感を介した出来事の性質を問う絞り込んだ発問をまずすべきだ、との仮説を生成するに至った。なぜならば、性質を生徒に問うことで「音楽を形づくっている要素」の持つ意味や心情への働きを深く探求できると考えられるからである。

2 「教科横断的な視点」による「発問」

2.1 「発問」の先行研究

そこで、筆者らは具現化に向けた指導方略として、教師による「発問」に着目した。「発問」については、落合(1986)は「文型に関係なく、文脈を考慮に入れて、子どもの思考や論理をゆさぶり発展させるねらいと内容をもった教師側からの言語的発言」¹⁰⁾と子どもの内面に働きかける定義を示している。また、「発問」の先行研究にはMills(1996)¹¹⁾による発問の機能を基準に分類する「タイプ」の研究<表1>、とBloom(1956)¹²⁾による発問の難易度を基準に分類する「水準」の研究<表2>、およびRowe(1986)¹³⁾による教師の発問から子どもが答えるまでの時間を基準にした「間」の研究などがある¹⁴⁾。

<表1>発問タイプの分析基準 (Mills, 1996)

タイプ	機能
閉じた (closed)	一つ特定の答えを見つける。
開いた (open)	多様な答えを見つけることが推奨される。
誘導 (leading)	質問の内容とトーンにより、子どもをある特定の答えに誘導する。
狭い (narrow)	簡潔で明瞭な答えを推奨する。
論証的 (discursive)	長くて、理由をはっきり述べる答えを推奨する。
明瞭な (clear)	授業の流れにきちんと沿った発問。
あいまいな (confused)	文脈が不明瞭であったり、余分な言い回しや別の発問が入っているために意図がわかりにくい発問。
みせかけの (pseudo-question)	疑問形だが、意見を述べたり命令したりする目的で行われる発問。

<表2>発問水準の分析 (Bloom, 1956)

水準	内容
1. 知識 (Knowledge)	既習内容の再生と再認
2. 理解 (Comprehension)	教材、資料から理解したことを明確化・言い換え・編成・推測・説明する。
3. 応用 (Application)	1つの正しい答えをもつ問題を解くために、情報を利用する。
4. 分析 (Analysis)	クリティカルシンキング (批判的思考)、理由・目的 (主題) の明確化。特定の情報から推論する、根拠づけられているか結果を分析する。
5. 総合 (Synthesis)	拡散的でオリジナルな考え方、オリジナルな計画の編成・提案・デザイン・物語。
6. 評価 (Evaluation)	与えられた情報のメリットを判断する、意見を言う、基準の適用。

一方、音楽科の授業における「発問」の研究には、吉田（2004）¹⁵⁾の〈赤とんぼ〉（三木露風作詞・山田耕筰作曲）の歌詞にある「お里」の意味を問うなど、赤とんぼと三木露風の「姐や」にまつわるエピソードをもとに歌詞について議論する実践研究がある。この議論の結果から①発問の力によって学習者は思考を促されている、②発問が音楽作品に対する見方を変える、といった結論を導いている。田中（2015）¹⁶⁾は教員養成大学での授業者の発問力を高める指導方法の実践報告をしている。この報告では中学校2年生を対象にした教育実習生が、「強弱」を指導内容とする歌唱の授業で、子どもの発言を肯定的に取り上げ、臨機応変に授業のねらいに添った思考を促す発問ができるスキルを身に付ける必要があるとしている。また、石光（2018）¹⁷⁾は吉田の音楽授業の発問の機能についての先行研究をもとに、具体的な発問の方法と思考との関係について手掛かりを得る実践報告を行っている。

しかし、吉田の研究は歌詞の背景や意味について探求しているが、実際どう歌うかという音楽的思考について明らかにされていない。また、田中、石光の研究は音楽的思考を促す発問を対象としているが、「教科等横断的な視点」での実践ではない。

2.2 実感を伴う理解を想定した「発問」

では、音楽科の授業で「教科等横断的な視点」を反映する「発問」はどう考えればよいのであろうか。今回の学習指導要領改訂によって、音楽科の目標に「音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す」¹⁸⁾と設定された。筆者らはこの「音楽的な見方・考え方」は、先に例示した《夏の思い出》のように当事者意識を問うことによって見出されると考えている。こうした問いが、新学習指導要領では「音楽的な見方・考え方を働かせて学習をすることによって、実感を伴った理解による『知識』の習得、必要性の実感を伴う『技能』の習得、質の高い『思考力、判断力、表現力等』の育成、人生や社会において学びを生かそうとする意識をもった『学びに向かう力、人間性等』の涵養が実現する。」¹⁹⁾という考え方につながると解釈できる。特に、「実感を伴った理解による『知識』の習得、必要性の実感を伴う『技能』の習得」というように、「実感を伴う」という五感を通じた習得を目指している点が音楽科特有の「知識」であって「技能」である。実際、音楽科における「知識」について小学校学習指導要領解説音楽編では、「児童が音楽を形づくっている要素などの働きについて理解し、表現や鑑賞などに生かすことのできるような知識である。このような知識は、表現や鑑賞の活動をとおして、実感を伴いながら理解されるようにしなければならない。したがって、ここで言う『知識』とは、曲名や、音符、休符、記号や用語の名称などの知識のみを指すものではない。児童一人一人が、体を動かす活動などを含むような学習過程において、音楽に対する感性などを働かせたり感じ取り、理解したものであり、個々の感じ方や考え方等に依じて習得されたり、新たな学習過程を通して更新されたりしていくものである。」²⁰⁾と「知識」の定義に五感を通じた意味を含ませている。

このように考えると、〔共通事項〕に示されている「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととのかわりについて考える」²¹⁾学習活動に、「教科等横断的な視点」として実感を伴う理解を想定した音楽的思考を促す発問が研究内容となる。

3 研究の方法

そこで、本研究ではここまでの考え方をもとに、教材曲の性質と「音楽を形づくっている要素」とを関連付ける「発問」、及び、それらによる学びの深まりについて考察することにした。分析の対象は授業中の教師による「発問」に対する生徒の回答の文脈とワークシートの記載内容である。また、「発問」の定義は落合のものを使用する。音楽表現（歌唱）の論拠となる文脈をもとに思考する「発問」を探求するためである。

教材曲は中学校歌唱共通教材の《花》（武島羽衣作詞・滝廉太郎作曲）である。この曲を選んだ理由は、本研究の実践研究校のある新潟県上越市の「高田公園」の桜が、東京「上野恩賜公園」と青森「弘前公園」と並んで“日本三大夜桜”のひとつであるからである。生徒にとって毎年あたりまえのように目にしてきた地元の「桜」の風景が、自身の心にどういった印象を知らず知らずのうちにもたらしてきたのか、実感を伴う「教科横断的な視点」、かつ音楽的な視点から捉え直すきっかけになる展開を筆者らは想定している。その一方で、Millsによる「発問」のタイプ<表1>やBloomによる「発問」の水準<表2>などが、音楽科での「知識」（上記、下線部）を養う「発問」にどう関連付けると五感を通じた意味を含められるのか問題意識が生じた。

4 授業計画

授業の計画は全2時間で、第1時は《日本男児》と《花》との作風の違いを考え印象の違いをまとめる。そして《花》について遅めの速さのピアノ伴奏に合わせながら2声部に分かれ音を重ねながら歌えるようになる。第2時は滝廉太郎のピアノ演奏に多大な影響をもたらしたケーベルと滝廉太郎との「花」についての会話のやり取りを「教科等横断的な視点」として発問し、具体的に「音楽を形づくっている要素」をどう操作して歌うか実感を伴った音楽的思考を求める。そして、そこで考察した意見を取りまとめ歌ってみる。

実施日時：平成30年4月12日（木）、19日（木）

授業者：小助川謙二

対象生徒：上越市立潮陵中学校第3学年 14名

第3学年音楽科指導案

1. 題材の目標 曲想や強弱の特徴を捉え、曲にふさわしい歌い方をしよう

[テクスチャ、強弱、音の重なり]

2. 第1時の展開 (1/2)

本時	○学習内容 ・予想される生徒の反応	●教師の支援 ◎評価規準
導入 5	○「花」の範唱を聴き、曲全体の曲想・構造を捉える。 ・曲は総じて明るかった。 ・曲は合唱の部分があった。	●聴く前にどんな観点があるかを提示しておく。 (曲想→明るい・暗い、構造→斉唱だったか合唱だったか)
展開 20 20	○全体で「花」の音取りをする。 ○作曲家・作詞者・曲ができた背景・歌詞についてまとめる。《日本男児》と《花》の雰囲気の違いについて考える。 ・これまではピアノ伴奏がない曲だったんだ。 ・《花》より以前の作風は勇ましい感じの曲だったね。 ○歌詞の内容について全体で確認する。 ・この曲は情景を表している曲なんだね。	●全員でソプラノパート→アルトパート→2パート分かれて歌う、の順に行く。 ●ピアノの伴奏の有無を基に、《日本男児》と《花》とで、 <u>雰囲気がどう違うとを感じるか発問する</u> ◎歌詞の内容や曲のできた背景を意欲的に理解しようとしている。【音楽への関心・意欲・態度】
終末 5	○本時のまとめとして、《花》を通して歌い、次回の学習内容の確認をする。	

3. 第2時の展開 (2/2)

本時	○学習内容 ・予想される生徒の反応	●教師の支援 ◎評価規準
導入 10	○前回の振り返りとして、作曲家・作詞者、作曲された背景の確認、発声練習の後《花》を一度歌う。	●作曲家・作詞者を子どもに問いかける。
展開 5 15 10	○ケーベルと作曲家とのやりとりを確認し、作曲家が「桜」のどのようなところに美しいと感じていたのか推察してワークシートに記入する。 ○歌詞に対する強弱を確認し、どんな <i>f</i> 、 <i>mf</i> にしたらよいか各自考える。その後、グループを作り、意見交換する。その後、全体で共有する。 ・ <i>f</i> は感動する気持ちが大きくなっている感じ。 ○クラスで上がった強弱の付け方を意識しながら全員で歌って確認する。	●ケーベルと滝とのやりとりの引用を読み、 <u>滝が「桜」の何について美しいと考えていたか発問する</u> ●春に見る「桜」の文脈を考えると、 <u>どのような雰囲気の強弱にすべきか発問する</u> ◎作曲家の「桜」に対する考え方を認識し、それを表現するために曲想や強弱の付け方に思いや意図を持っている。【音楽表現の創意工夫】 ◎強弱や音色など、歌詞の内容や曲想、作曲家の考え方を表現するために必要な技能を身につけている。【音楽表現の技能】
終末 10	○まとめとして《花》を通して歌い、ワークシートに授業のまとめを記入する。	

5 考察：音楽科の「発問」の構造

上記の学習指導案で第1時では、滝廉太郎の作風が《花》の作曲では西洋音楽の音楽理論が取り入れられ大きく雰囲気が変わったことを認識できるように教師が発問している。下記【発問①】が順次答えた生徒の回答である。伴奏の有無、音の重なりの有無など対比して聴き取ることができている。(生徒3, 生徒4の下線部)

【発問①】《日本男児》と《花》との雰囲気の違いについての発問に対する回答。(発言順)

- 生徒1 《日本男児》男の人が歌っている。
 生徒2 《日本男児》元気のある曲。《花》すがすがしい。
 生徒3 《日本男児》伴奏楽器が使われていなかった。《花》ピアノの伴奏が付いている。
 生徒4 《日本男児》歌詞の区切りが多く歌の重なりが無い。

第2時前半では曲の題名がなぜ《桜》ではなく《花》なのか思考する展開である。ここでの【発問②】が「教科等横断的な視点」であって、「桜」が1週間程度しか花をつけていない特徴に、潜在的な日本人の美意識があるとする滝廉太郎がケーベル先生に共感する場面について発問している。(【発問②】、下線部)

【発問②】「花」が日本人にもたらす意味について

- 教師1 ケーベルは「わたしは、日本人の花と言ったら、菊ではなく、なんといっても、桜がぴったりだと思うよ。花の満開のころ、桜の木の上を見上げながら通ると、あのふくよかな香り、そして、見ているまにちらちら散ってくるね。菊と違って、ほんの短いのちを、せいっぱいさいしているところがいい。滝さんはどうですか。」²⁾と問いかけたところ滝廉太郎も「ほくもまったくそう思います。」と同意見で答えている。滝廉太郎はケーベルの発言の何に対して「ほくもまったくそう思いますよ」と答えているのでしょうか。ワークシートに各自書いてみましょう。
- 教師2 桜は何日くらい咲き続けますか。
 生徒5 1週間
 教師3 そう、そのくらいですね。今年の高田公園の桜は満開の時期が例年よりも早く、散るのが早く感じたね。

【発問③】どのような雰囲気の強弱にすべきか(一重下線は「音楽を形づくっている要素」を含む回答、二重下線は曲の性質や雰囲気に関する回答)

- 教師4 「春のうららの・・・船人が」は、どういう気持ちで歌ったらいかな
 生徒6 リズムにのって歌う
 教師5 リズムにのって歌うとはどんな感じかな
 生徒7 ウキウキ
 教師6 ウキウキする感じ。ウキウキはどう歌ったらいかな
 生徒8 明るい声
 教師7 明るい声？じゃあ、その明るい声はどういった気分になるのかな
 生徒9 あたたかい感じ・・・
 教師8 では、次の「權のしずくの花と散る」はどういう感じで歌ったらいですか
 生徒10 波のように
 生徒11 波のようにってどんな感じで歌えばよいのでしょうか
 生徒12 こんな感じ(右腕で正弦曲線をたどるように動かしている)
 教師9 何か強調したいことがあるのかな
 生徒13 桜の美しさ。強調するように1つ1つの音をはっきり言って(音を)しっかり伸ばす

第2時後半では【発問②】の滝廉太郎の「桜」に対する思いをもとに【発問③】による、《花》を歌唱する際の音楽的な表現を議論する場面である。つまり、「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととのかかわりについて考える」ための発問で

ある。生徒が「音楽を形づくっている要素」(生徒6, 生徒8)と「それらの働きが生み出す特質や雰囲気」(生徒7, 生徒9)が関連付けられるよう追質問していることが分かる。すなわち、「どのような」「どういう」という発問に対して、「リズムにのって歌う」という要素名を含んだ回答がある。その回答に「リズムにのって歌うとはどんな感じかな」とリズムによって生み出される「ウキウキ」という特質を問い返している。そうすることで、「リズム」と「ウキウキ」とを関連付けている。同様に音色を知覚した「明るい声」と「あたたかい感じ」とが関連付けられている。そして実際にどういった技能で歌うかが議論される必要がある。生徒13では「桜の美しさ」を「強調するように1つ1つの音をはっきり言って(音を)しっかり伸ばす」と「桜」の「美しい」という性質を歌唱で具体的にどう歌うかクラスの総意としてまとめることに至っている。

上記の発問の構造を整理すると、「教科横断的な視点」とする【発問②】は、Bloomの「2.理解 (Comprehension)」に相当する。そして「どのような」「どういう」といったMillsの「開いた (open)」発問によって生徒に音楽的思考が始まる。ここで、音楽科特有の発問の構造と考えられる点は、「開いた (open)」発問が繰り返される(教師5)(教師6)(教師7)ことである。かつ生徒との問答は「リズム」(教師5)に対して「ウキウキ」(生徒7), 「ウキウキ」(教師6)に対して「明るい声 (声色)」(生徒8)というように、「リズム」や「明るい声 (声色)」といった知覚した「音楽を形づくっている要素」と、「ウキウキ」「あたたかい感じ」(生徒9)など「それらの働きが生み出す特質や雰囲気」といった感受した発問と回答とが交互に現れている。つまり、〔共通事項〕にある知覚と感受の対象となる両者を生徒から発言として引き出す場合、最低2回の「発問」が必要になると言える。

また、ワークシートの「学習まとめ」は、「わかったこと、どういう気持ちで歌ったか、また気持ちを表現するためにどのようにして歌ったかをまとめよう」という課題であった。具体的な記載事例は以下のとおりである。

【ワークシート】の記載事例

- ・戦争中に作られた曲とは思えない。眺めを例えられない美しい桜や、花が散る瞬間の切なさなどを思い浮かべながら歌うことを心掛けた。「春の・・・川」はやわらかい感じで歌えた。「櫛のしづく・・・る」は桜に対する美しい気持ちを歌って表現するのは難しかったけれど、とにかく優しい気持ちで考えられた。
- ・「春の・・・」という部分はやさしく、「櫛のしづく・・・」という部分を桜に対する美しい気持ちを強調し、「ながめ・・・」という部分は心の中で思うように歌うということを考えて歌うことができた。
- ・「リズムにのって歌う、やさしく明るい声」や「波のように桜に対する美しい気持ちを強調」など詳しく調べなければ知らないくらいの細かい努力があって作曲家はすごいと思いました。
- ・作曲した滝廉太郎の気分になって歌うことができました。フォルテやメゾフォルテなどの音の強弱に気を付けて歌えました。
- ・この曲が作られた時代の歌はまったく違う感じで驚きましたが、そんな中でこのような自然や景色をメインにした歌を作ったのはすごいと思いました。また、作った人の気持ちを歌の強弱や雰囲気^で表現しているのはすごいと思いました。だから私もその各場所でどのようにうたうか意識してうたえました。
- ・《花》が作曲されたときは軍が歌うような暗い歌とかしかなかったけど、《花》はとても明るく花を開いて明るい気持ちになった人もいます。《花》を歌うときは明るく歌うことができたのでよかったです。桜に対する美しい気持ちを強調しながら歌いました。この歌で明るい気持ちになれました。
- ・《花》という歌では強弱やその歌詞に込められた意味を意識して歌えました。最初は明るく歌い途中は桜に対する気持ちを表すために強く歌い、最後はかみしめるように歌うことができました。桜のほんの短いのちでせいっぱい咲くはかない様子を感じ歌うことができました。

筆者らはワークシートの文面に、歌を歌うにあたり「音楽を形づくっている要素」の他に、「滝廉太郎の気持ち」「花」「桜」の語彙を使用し思いや意図を持って歌ったかどうか、の記載の有無を数えた。その結果、14人のうち記載有りが12人で、記載無しが2人であった。直接確率計算 (js-STAR ver.9.0.6jを使用) によると、その偶然確率は $p=0.0065$ (片側検定) であり、有意水準1%で有意であった。よって、今回の授業は教材曲の性質と「音楽を形づくっている要素」とを関連付ける「発問」による導入効果が見られた授業であったと言える。

6 まとめと今後の課題

今回の研究は、冒頭で述べた「あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力や、教科等の学習を通じて

身に付けた力を統合的に活用して現代的な諸課題に対応していくための資質・能力を、教育課程全体を見渡していくことが重要」という点について具体的に音楽科の授業にこの考え方をどう反映させればよいのか、授業改善への研究動機があった。「教科等横断的な学習を充実」とはいても授業を受けている生徒に、なぜ「教科等横断的な視点」による学習をするのか趣旨が伝わらなければ意味がない。特に、音楽科の授業は新学習指導要領の改訂作業を担ってきた芸術ワーキンググループでの意見においても、「学校で、音楽で学んでいることが社会に開かれているかということについて、疑問を感じる」「学校で学んだことが社会に生かされているかということをもっと考えていく必要がある」（第1回）、「例えば、子どもたちが授業で学んだことを学校生活の中で表現し、喜ばれたり言葉をかけられたりする経験ができるよう、学校現場で取り組めるといいと思う。これは、学校自体が、学校で学んでいることをいかに社会とつなげて考えていけるかという意識をもつことでもある。」（第6回）²³⁾と「社会とつなげて考える」ことが問題点として指摘されているように、授業での音楽活動を生徒の生活上の文脈で意味付ける必要性が求められていると改めて感じた。

最後に、本研究の授業では生徒の生活上の文脈としての「高田公園の桜」について、議論に取り上げられなかったことが課題として残った。あまりにも議論に多くの時間を費やしすぎると、音や音楽を通じて「豊かな情操を培う」という本来の目標に到達できなくなる危険性があるからである。週1時間の授業時数で効果的に学びを保障する授業開発は容易ではない。

※本研究は、尾崎の仮説に基づいて小助川が学習指導案を作成し実践した授業である。授業分析と本稿執筆は尾崎が担当した。

注

- 1) 文部科学省 (2018a) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説総則編』東山書房, p.5
- 2) 文部科学省 (2018a), 同上書, p.49
- 3) 文部科学省 (2018a), 同上書, p.5
- 4) 中央教育審議会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ (報告)」平成28年8月26日, 教育課程部会, p.22
- 5) 学校教育法第30条第2項において、「思考力, 判断力, 表現力等」とは、「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力と規定されている。この「知識及び技能を活用して課題を解決する」という過程については、中央教育審議会答申が指摘するように、大きく分類して次の三つがあると考えられる。
 - ・物事の中から問題を見だし, その問題を定義し解決の方向性を決定し, 解決方法を探して計画を立て, 結果を予測しながら実行し, 振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程
 - ・精査した情報を基に自分の考えを形成し, 文章や発話によって表現したり, 目的や場面, 状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い, 多様な考えを理解したり, 集団としての考えを形成したりしていく過程
 - ・思いや考えを基に構想し, 意味や価値を創造していく過程
- 文部科学省 (2018), 前掲書, pp.38-39
- 6) 「指導方略 (ストラテジー)」とは、授業の構想の段階で「教材の吟味に基づいて、子どもたちに具体的に教材提示の方法として工夫し、準備する技のこと」である。

長島真人 (2001) 「音楽教授における指導方略と指導技術」『音楽科重要用語300の基礎知識』明治図書, p.152
- 7) 兼平佳枝 (2017) 「音楽的思考」日本学校音楽教育実践学会編『音楽教育実践学事典』音楽之友社, p.40
- 8) 文部科学省 (2018b) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示)』東山書房, p.103
- 9) 読売新聞 (2000) 2000年6月6日付け朝刊「こころの四季」p.36
- 10) 落合幸子 (1986) 『発展発問の効果に関する教育心理学的研究』風間書房, p.34
- 11) Mills, K. (1996), *Questions, Answers and Feedback in primary teaching*, Center for research in elementary and primary education, University of Warwick, p.5
- 12) Bloom, B. S. (1956), *Taxonomy of Educational Objectives, Handbook I: The Cognitive Domain New York*: David McKay, p.18
- 13) Rowe, M. B. (2003), Wait-time and rewards as instructional variables, their influence on language, logic, and fate control: Part one-Wait-time, *Journal of Research in Science Teaching 40 (Suppl.)*, pp.S19-S32
- 14) 河野義章編 (2009) 『わかる授業の科学的探究 授業研究法入門』図書文化社, pp.85-90
- 15) 石光政徳 (2018) 「音楽授業における教師の発問と生徒の思考の関係—中等教育学校4年生における歌唱授業の場合—」『学校音楽教育実践論集』第2号, 日本学校音楽教育実践学会, pp.52-53
- 16) 田中龍三 (2015) 「教員養成大学における音楽科授業での発問力を高める指導—ドラマ教育の手法“Hot-seating”を用いて—」『学校音楽教育研究』Vol.19, 日本学校音楽教育実践学会, pp.216-217

- 17) 吉田孝 (2004) 「音楽の授業における発問の機能—『赤とんぼ』の授業を例にして」『音楽教育実践ジャーナル』 Vol.2 no.1, 日本音楽教育学会, pp.91-97
- 18) 文部科学省 (2018b), 前掲書, p.99
- 19) 文部科学省 (2018c) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説音楽編』 教育芸術社, p.11
- 20) 文部科学省 (2018d) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説音楽編』 東洋館出版, p.12
- 21) 文部科学省 (2018b), 前掲書, p.103
- 22) 西沢正太郎 (1992) 『滝廉太郎 日本の心を世界の歌に』 音楽之友社, p.127
- 23) 教育課程部会 芸術ワーキンググループ (第7回) 配付資料
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/069/siryo/attach/1371894.htm (2018年10月2日閲)

Introducing Effects of “Questions” by “Crossing Subjects Perspective” to be the Basis for Musical Thinking

: From the practice of singing common teaching materials “Bloom” for junior high school

Yûji OZAKI* · Kenji KOSUKEGAWA**

ABSTRACT

This paper is a study to clarify introducing effects of “questions” by “crossing subjects perspective” in the music department.

The authors generated a hypothesis that if a teacher intends to train students to “qualities and abilities” as instructed by new the teaching guidelines of the junior high school in classes in the music department, he should ask “questions” concerning the nature of the events through five senses. And we conducted a practical study on singing common teaching material “Bloom” (composition written by Rentaro Taki · songwriter Hagoromo Takeshima) for the third grade of junior high school. As a “crossing subjects perspective” in class, in the class we conducted “questions” about the meaning that Bloom(cherry blossom) brings to hearts of Japanese people. Based on the argument, the students made activities to think musically about how they should sing specifically.

As a result of the class, the authors were able to obtain significant results in the introducing effects of “questions”. Students wrote the rationale for singing to the worksheet not only “the element that is shaping the music” but also for example “I tried to sing while imagining the painfulness of the moment the flower scattered”.